



Title	「モヨロ貝塚を考える―新視点からの展望―」を振り返る
Author(s)	中沢, 祐一
Citation	北海道大学考古学研究室研究紀要, 5, 51-53
Issue Date	2026-01-08
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98746
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98746
Type	departmental bulletin paper
File Information	06 WS Nakazawa.pdf



「モヨロ貝塚を考える—新視点からの展望—」を振り返る

中沢祐一^a

a 北海道大学総合博物館 ynakazawa@museum.hokudai.ac.jp

要旨 北海道帝国大学医学部解剖学教室が収集した考古資料の中には、モヨロ貝塚から発掘された資料がある。これらは1941・42（昭和16・17）年に緊急性の高い調査で回収された「戦中」資料と、1947・48（昭和22・23）年に学術発掘された「戦後」資料からなる。2025年3月22・23日に行われたWORKSHOP「モヨロ貝塚を考える—新視点からの展望—」では気鋭の研究者らが研究報告を行い、モヨロ貝塚出土資料の意義付けもなされた。本号にはその成果論文を所収する。

キーワード：モヨロ貝塚, 考古資料

1. 経緯

北海道大学にモヨロ貝塚の出土資料があることを知ったのは、2012年の終わり頃だった。当時筆者は医学研究科人類進化学分野（以下、人類進化学教室と呼称）に所属しており、アイヌ遺骨等の返還を見据え、かつて北海道帝国大学医学部解剖学教室がアイヌ墓から掘り出したアイヌの方々のご遺骨に伴う副葬品の整理に携わっていた。一方、アイヌ墓の発掘とは別に、解剖学教室は戦前から戦後にかけて考古学的な発掘調査も精力的に実施しており、様々な遺跡から回収された考古資料が多量に残されていた（以下、医学部由来の考古資料と呼称）。

医学部由来の考古資料は、道内の先史時代の遺跡を中心とし、樺太・千島、本州からの収集遺物も含む。中でもモヨロ貝塚から出土した資料の質・量は白眉であり、個人的にもオホーツク文化の遺物を間近で見るのは、大学院修士課程の時に大井晴男先生の講義で香深井A遺跡の出土遺物を実見して以来だった。医学部由来の考古資料には、モヨロ貝塚以外にも学史的にも著名な遺跡から得られた遺物が少なくなく、重要性は明らかだった。一方で、今日の埋蔵文化財保護体制が確立する以前の、考古学が学問としても未分化な時代の調査で得られた資料であり、残された資料の意義付けは今日の私たちに託されている。未整理の資料も少なくなく、直ちに全体像を公表できないものの、活用しないままにいるということも資料の存在価値を損なうと考え、信頼できる知人らに相談しつつ活用の途を考えた。

医学部由来の考古資料の学術的価値を認めて、展示利用案を最初に提案したのは種石悠氏（北洋大学）だった。2016年に種石氏の企画した「北から

の文化の波」（北海道立北方民族博物館第31回特別展）が開かれ、北大にあったモヨロ貝塚出土を含むいくつかの主要な資料も展示された。これを皮切りに、2019年には坂本尚史氏が企画した「もうひとつの古代世界—オホーツク文化—」が江別市の北海道埋蔵文化財センターで開かれ、オホーツク文化というテーマのもとにモヨロ貝塚の資料も公開された。2021年度には、オホーツク文化の研究者である東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設の熊本俊朗氏と横浜ユーシア文化館の高橋健氏（現・立教大学）によって「オホーツク文化—あなたの知らない古代—」が企画され、北見市常呂町と横浜市、さらに大阪府立近つ飛鳥博物館でもモヨロ貝塚出土の資料が巡回展示される運びとなった。いずれも期間限定の企画展示だったが、それまで北大構内でひっそりと収蔵されていたモヨロ貝塚の出土資料が陽の目をみたことになる。

2. モヨロ貝塚出土考古遺物

2012年以来、札幌構内の様々な施設の間を数年間に1度という高頻度で移動することを余儀なくされつつ、整理を進めてきた。この間、人類進化学教室は文化財としての適切な管理の必要性（保管場所の変更に伴う引っ越しが資料の毀損を招くこと、冬季の暖房故障や耐震不備による労働環境の悪化など）を上層部へ進言し続けた。ようやく2022年に恒久的な資料管理場所が決定した。場所は、農学部と総合博物館（理学部本館）の間に位置する旧農学校図書館書庫である。

しかし、未整理な出土物はまだ沢山残されてい

る。甲乙を付けることはできないが、限られた人員と時間の制約下にあり、どの地域のどの資料体から整理するか判断が問われた。これまでの3回の学外展示と研究者による資料調査希望が最も多い実情を考慮し、モヨロ貝塚出土資料の整理を2022年度より着手した。整理作業チームは、伊藤麻由、大沼まり（医学研究院・技術補助員）および梨羽賢太郎（当時、北大文学部1年生）が主要メンバーとなった。この間、筆者ら整理者の理解が及ばなかった金属器の保存処理や土器・骨角器・獣骨の詳細などについて、田口尚氏、熊木氏、澤井玄氏、高橋氏、種石氏、渡辺双葉氏らの考古学的知見によって補完し、2025年3月に図録を刊行した（中沢ほか編2025）。

北大医学部が管理していたモヨロ貝塚出土遺物は、1941・42（昭和16・17）年の「戦中」資料と1947・48（昭和22・23）年に学術発掘された「戦後」資料からなる。整理当初からこれらの「戦中」と「戦後」の資料を区分した。「戦中」の資料は太平洋戦争中における海軍の港湾工事に伴う緊急性の高い調査であり、北大解剖学教室の児玉作左衛門が主となった調査である。多数のオホーツク人骨とともに、土器や骨角器などの文化遺物も回収された。この「戦中」の考古遺物については、大場利夫が骨角器、土器、石器、金属器などの遺物の種別ごとにまとめた論考が1950～60年代に『北方文化研究報告』に出されている（大場1955、1956、1957、1962）。整理作業では、これらの報告で図示された遺物や論文に遺物番号が示された遺物の探索を行い、現物との対応が確認できた遺物については、写真を撮影し優先的に図録へ収めた。

「戦後」の資料体は、東京大学と北海道大学の研究者を中心とする学術調査団によって回収されている。調査団は、東大からは文学部考古学研究室の駒井和愛、北大の名取武光、北大医学部解剖学教室の伊藤昌一、大場らだった。この「戦後」の調査では、いくつかの遺構が調査されている。第7号住居、第10号住居、第10号竪穴西貝塚、そして「第二貝塚」^(注1)である。「第二貝塚」は19×9×2mの直方体のトレンチであり、貝層の中から30体に及ぶオホーツク人骨とそれに伴う副葬品が確認されている。北大医学部解剖学教室は主としてこの「墓域」の調査と出土オホーツク人骨の形態的特徴に関する報告（伊藤1964）を行っている。遺物については、名取・大場（1964）に記載や写真が掲載されているため、それらの記録を参照し、遺物があるかを確認した。残されていない遺物も少なくなかったが、墓壙番号と対応付けた。

3. ワークショップ

モヨロ貝塚の資料を実見しに北大まで足を運んだ研究者は少なくなく、彼らと対話する中で、それぞれがもつ視点、考え、熱意を受け取った。研究者の考えを共有する機会を設けることによって、モヨロ貝塚とその出土資料の今日的課題や意義について考える機会をもつことができればと思った。結果、2025年3月22・23日に北大医学部百年記念館にてワークショップを実施した。以下、発表者と発表タイトルを発表順に記す。

（1）熊木俊朗：「モヨロ調査団」ガラス乾板写真の高精細スキャン画像を読み解く（2）福井淳一：オホーツク文化に特徴的な釣針と石錘はどのように使われたのか？（3）高橋 健：モヨロ貝塚出土の骨角器―主に掘り具について―（4）内山幸子：モヨロ貝塚から出土したイヌ科動物について（5）川添和暁：エイ尾棘製刺突具について―日本列島先史時代からオホーツク文化期における毒矢の使用―（6）村本周三：モヨロ貝塚出土の石器を考える（7）種石 悠：モヨロ貝塚採集の北大式土器について（8）澤井 玄：モヨロ貝塚の擦文土器―オホーツク人が去った後のモヨロ貝塚―（9）須山貴史・田口 尚：モヨロ貝塚出土金属製品の保存処理と収蔵・保管環境を考える

1日目に（1）～（5）の発表、2日目に（6）～（9）の発表が行われ、各日ともに発表者と会場参加者を交え、活発な質疑応答とディスカッションがなされた。

ワークショップが行われた週末はアイドル歌手のコンサートが札幌で開催されたため、宿の手配に難儀した方々が少なかった。本州から来られた発表者や道東からも足を運んでいただいた参加者の方々に御礼申し上げる。また、2日間にわたり会場運営をお手伝いいただいた松本航太君、橋本佳奈さん、梨羽君へも御礼申し上げたい。

4. 論文

ワークショップの開催へはこぎつけたものの、予稿集の準備までは手が回らなかった。閉会后、参加者から成果を公表することへの要望を受けた。掲載先を求め中、北大文学部考古学研究室から特集論文の掲載を認めてもらう運びとなった。

本号には、6本の論文を掲載している。熊木・久保論文は、「戦後」のモヨロ貝塚の発掘調査を記録したガラス乾板写真（デジタルアーカイブとして公開済）のうち、これまで情報量が不足していたために墓の特定に至らなかった写真の検討を行っている。画像から判別可能な人骨の形質的特徴や埋葬さ

れた土器の特徴を手がかりとしている。福井論文は、オホーツク文化の担い手が用いた釣針と石錘に焦点を当て、それらが漁具としてどのように用いられたのか、どのような海産物を捕獲したのかといったオホーツク文化の漁法に関する研究である。高橋論文は、モヨロ貝塚から多量に出土した鯨骨製掘り具の基礎的な研究である。明治時代から始まる研究史における分類名称の取り扱い方の検討に続き、3次元計測によって刃部幅や体積を計量し、骨鋏、骨篋、骨斧といった掘り具の器種分類の妥当性を検証している。内山論文は、「戦中」の資料に含まれていた線刻のあるイヌの上腕骨の大きさの多角的な検討から、エゾオオカミの可能性を指摘する。同様な線刻のあるオオカミ上腕骨が周辺地域でも見つかっており、オホーツク文化の動物観の再考をうながす。川添論文は、刺突具と考えられてきたエイの尾棘の出土例をオホーツク文化期や北海道に限定せずに網羅的に整理した論文である。医学部由来の考古資料の中には実物を確認できていないものの、モヨロ貝塚でもエイ尾棘の出土報告があり（大場1955）、その機能・用途が注目される。須山・田口論文は、鉄製品の保存処理に関するスタンダードな処理法について述べた文献である。モヨロ貝塚からは多彩な鉄器が出土しており、今後の活用を見通すと、適切な保存処理を継続しなければならない。

5. おわりに

医学部由来の考古資料は、2024年度末に医学研究院から総合博物館へ管理換えとなった。人類進化学教室も閉じられ、筆者らも白い巨塔を後にした。

資料収集を目的として発掘する時代は終わり、資料管理と活用による資料の価値づけが問われる時代でもある。現行の文化財保護法に則った文化財登録を進めるという北大方針から、医学部が調査した遺跡の出土物の帰属や管理について関連する行政機関とも協議しながら進めているところである。自治体によっては、遺跡の存在が知られながら、それらの遺跡からの出土資料が地元に残されていないという不条理もある。今後、医学部由来の考古資料の活用が進むことによって、地域史の構築、歴史文化教育、文化財の次世代への継承など多面的な展開が期待できるだろう。

注

(1) 「第二貝塚」という呼称は図録（中沢ほか編2025）によっている。これは遺物を収納していたラベルに「貝塚、第二貝塚」という記載があり、「貝塚」と「第二貝塚」の二通りの呼称があったと筆者

が考えたことによる。ただし、異論もある。「竪穴隣接第二貝塚」という表記をもつ遺物収納ラベルもあることから、「第二貝塚」を第10号竪穴西貝塚と同じと解することも（中沢ほか編2025）、別の解釈である。あるいは、遺物の管理主体が人骨資料を主たる研究対象とした北大医学部解剖学教室であったことから、戦中に調査した網走川に隣接する範囲に存在した多数の人骨を回収した貝塚に引き続き、戦後の調査によって墓壙群からやはり多数の人骨が検出された貝塚を「第二貝塚」と呼称した可能性もあるだろう。いずれにせよ、1947・48年に医学部が主体的に調査した、多数の墓壙が発掘された貝塚を指す。

引用文献

- 伊藤昌一 1964「モヨロ貝塚における埋葬状態及び人骨（頭蓋）」、駒井和愛（編）『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻 常呂・宇登呂・羅臼の遺跡 [別篇] 網走モヨロ貝塚』、pp.20-41、東京大学文学部、東京。
- 大場利夫 1955「モヨロ貝塚出土の骨角器」『北方文化研究報告』10、173-249。
- 大場利夫 1956「モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器」『北方文化研究報告』11、187-256。
- 大場利夫 1957「モヨロ貝塚出土の石器」『北方文化研究報告』12、167-221。
- 大場利夫 1962「モヨロ貝塚出土の金属器」『北方文化研究報告』17、165-196。
- 中沢祐一・伊藤麻由・大沼まり・澤井玄・高橋健・種石悠編 2025『北海道大学所蔵モヨロ貝塚（網走市）収集考古資料』北海道大学 <http://hdl.handle.net/2115/94609>
- 名取武光・大場利夫 1964「モヨロ貝塚出土の文化遺物」、駒井和愛（編）『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻 常呂・宇登呂・羅臼の遺跡 [別篇] 網走モヨロ貝塚』、pp.42-63、東京大学文学部、東京。